

2.7_3

(3) インターンシップ

2018年度も昨年度に引き続き、工学部の全学科でインターンシップが実施された。希望者数と派遣者数を表1に示す。合計欄の括弧書きの数値は、参考のために2017年度の希望者数と派遣者数を示したものである。希望者すべてを派遣することができているが、今年度の希望者数は昨年度と比較して減少している。

表2は、各学科が授業科目として単位認定しているインターンシップ科目の一覧である。インターンシップに参加し、各学科で定めた条件を満たした学生には、これらの科目の単位が認定される。

最後に、表3にインターンシップ特別講演の実施状況を示す。各系学科では、インターンシップの前後に民間企業から講師を招き、表3に示すような講演会を実施している。インターンシップの評価方法としては、レポート提出や実施報告書提出及び業務日誌等で行っている。

学生がインターンシップに参加する場合、各学科の担当教員が企業等へ実習の申込みを行い、学生はそれらの中から自分の希望によって企業等を選択する場合と、企業や学協会等が準備した公募型のインターンシップへ、インターネットなどを通じて学生が自主的に応募する方式の2つがある。企業や学協会は、将来の就職の際のミスマッチや学生の注目を高めるために、後者の公募型のインターンシップが増加傾向にある。しかし後者の公募型では必ずしも採用されるとは限らないので、派遣数を増やすには工学部として、受け入れ先に独自に対応するようなこともより積極的に行うことが必要であると考えられる。

一部の学科では例年2年生にも実施状況の発表会を聴講させ、そこでインターンシップに参加した学生から、自己の職業適性や人間関係について考える絶好の機会であり、将来の職業選択について高い視点が養成されるということを知ること、次年度インターンシップに積極的に参加する意識を高めるようにしている。このように、工学部全体としても今後の更なる工夫が必要であると思われる。

ここ最近参加者が減少している背景には、企業が熱休み以降実施している会社見学や1-DAY インターンシップの増加がある。学生にとっては少しでも早く就職活動を始めたいという思いがあるので、短期のものに複数回参加したがる傾向がある。これによって大学が目的とする長期のインターンシップは敬遠されている。さらにインターンシップに参加すると就職試験時に有利であるとの情報が広がっているので、就職先として考える企業以外は受けない傾向もある。このことは学生の視野を広げることと、深く仕事について知ることを妨げることになるので、インターンシップの本来の意義を学生に伝えると共に、企業に対しても教育効果の高いインターンシップの実施を依頼する必要がある。

表1 2018年度 工学部インターンシップ実績表 ()は2017年度の数

学 科 名	希望者数	派遣者数
物質生命化学科	8(18)	8(18)
マテリアル工学科	12(3)	12(2)
機械システム工学科	3(14)	3(14)
社会環境工学科	83(74)	76(66)
建築学科	22(31)	22(31)
情報電気電子工学科	13(6)	7(6)
数理工学科	4(0)	4(0)
合 計	145(146)	132(138)

表 2 2018 年度 各系学科のインターンシップの授業科目

学 科 名	授業科目名	必修・選択 科目	単 位 数
物質生命化学科	化学学外実習	選択	2
マテリアル工学科	マテリアル工学応用セミナー	選択	2
機械システム工学科	機械システム応用セミナー	選択	2
社会環境工学科	インターンシップ	選択	1
建築学科	インターンシップ	選択	2
情報電気電子工学科	インターンシップ第一	選択	1
	インターンシップ第二	選択	1
数理工学科	インターンシップ	選択	2

表 3 2018 年度 工学部インターンシップ特別講演実施状況

学 科 名	講 師 名	会 社 名
社会環境工学科	永村 恵子	日本大学 生産工学部